

編集後記

＜川井 啓市＞

『胃と腸』が送られてきた時の私の読み方にはひとつの型がある。まず主題、次に目次を見て、編集会議での討論を思い出す。そして、掲載されているなら、座談会の記事をまず読む。そこで、座談会に対する司会者の意図、出席者との討論のアウトラインを流し読みしながら、問題点を整理して、主題を読むようにしている。もちろんこのような読み方をしている人は多いだろうし、特集号をもつ医学雑誌は私は一般にこのようにしている。座談会の対話がスムーズに流れ、討論が整理されている時もあれば、出発点からなかなか出られず司会者が苦勞しておられる時もあり、それなりに読むのもまた楽しく、主題の展開の難かしさが想像され、つい司会者の立場で同情したりする。

今回の主題「消化管粘膜拡大観察と病態生理」は、その意味で座談会から、主題、また研究までの展開が非常によく整理されていて、X線、内視鏡および臨床病理の現況から将来にも話が進み、新しい織物が企画通りに作られているような感じである。

時によると、主題に目を通すのに疲れて、症例に逃避することもあるのだが、本号では一気に読めたし、また現在での問題点もよく浮き彫りにされたように思われる。

＜編集＞ 早期胃癌研究会